



北  
東  
南

A vertical ruler scale with major markings at every inch from 0 to 10. The numbers are black, except for the '0' which is red. The '0' is also enclosed in a red rectangular box. There are 12 smaller tick marks between each inch mark.

小牧山房詩稿

柳葉の木あれよ元あらねのうて

葉ふやねすまきはるをばね

小さるの落葉れてあひて

えりかと一本萬葉や梅の木

りまく

桜もよしやれよさすが

春



ねえやあれのまくら枕  
寝ゆ  
くつへ入るゝあねのま  
枕邊  
旅宿でゆきのまくらてぬか  
あれとねくらせむか  
おまかでつぐまでもやあせぬ  
毛子とまくらぬか  
わくもまくらぬか  
寝ゆ  
ああ

お産の便やうの御様のか  
まややねのうくらの便  
まくらやねねがちのあれ  
一立ふくらまくらのあ  
おてうだくらまくらのあ  
おせよおせよおせよ  
おのゆめくらやまくらのあ  
玉脂  
三県

乙部

はるはの水みずかくすすれのを

おとくはれのとおとせりう

せあくよまてせあれのれ

あはきとくあれれとくらむ

おれれとくらまのれのふ

ねのゆわせりよまくまき

○

山

峰

雨

か

柳

枝

花

葉

葉

枝

花

葉

葉

枝

花

せのやのひいにまに日と梅  
おれはれうてまくせあれ  
えりやうよや繁あうねの花  
か一重ねうまわうはえ河  
あひるまれてゆや水泊河  
川ゆや自ハ落葉て梅の新  
をきちてあくよさやれの福

年風

宿山

丸石

うなづかくまろばねのき陣  
まふかくたまじつてくめのむ  
おの自詮／＼やせにじゆく  
ねむ

○

やれくてはを延びるねの上

まよ

えほたまき・季春

内保 もちのひ

毛がくなくてあくへ 神よりよ活 楠と  
まくよこなど年とひくひくひくひくひく  
もぢりとめだらうと年とひくひく  
ひくひくおのあくひくひくひくひくひく  
ゆうやんたけゆくひくひくひくひくひく  
捨へつてひくひくひくひくひくひく  
わらくとゆくひくひくひくひくひく

きれひや地とくゆてひづる。也時  
かのねとひつてゆる小ねうれは事。乃様  
ゆふゆふあまゆく。雪の事。是も  
お悔やかゆつてゆる事。是も  
やのびてゆる事。是もゆく事。  
かくしてあはれゆる事。是も  
め由や往ゆる事。是もゆる事。  
山や一石ゆる事。是も  
まがまが眼にゆる事。是もゆる事。  
まぐらのゆる事。是もゆる事。  
たとえす海舟のゆる事。是もゆる事。  
すゆゆちる。是もゆる事。是も  
ゆる事。是もゆる事。是もゆる事。  
眉山  
あふせて。是もゆる事。是もゆる事。  
松臺  
すみゆる。是もゆる事。是もゆる事。

おまえをもつておまえのやうな  
おまえをもつておまえのやうな

一  
たまねぎのたまねぎ  
たまねぎのたまねぎ  
たまねぎのたまねぎ

山有之也。其名曰山。山者，萬物之祖也。故曰：萬物皆有祖焉。故曰：萬物皆有祖焉。

其の外に  
其の外に

人情事理，  
在於此也。

由之以也而多其也者也。不以也。不以也。

心事の如きやナラハニシテ  
此の業ニカズル

やあやかにわがのれども  
三半格



ものや林木等、常かり、至る處  
見る所のあればとさへよしむに、  
川の水のあらわは峰の花ノト  
見よとよき春の山の歯の所は  
うかがひて草木をもる。イセ  
をぬらして山をぬる。伊セ  
山のや唯、山の山の花をか  
たまひや山の山の花をか  
そよぎて林のかづら花もよせ、山の山  
くもよせたまくもよせ、山の山の花を  
おこひるをもよせ、山の山の花を  
それへ移す。山の山の花を  
峰をかえ山の山の花を  
れゆうひやつるは、山の山の花を  
山の山の花をかえ、山の山の花を  
それへ移す。山の山の花を  
峰をかえ山の山の花を

山の梅林のうちよりとよひナ 紫人  
入野うきりそまくゆうすけ 九月

被ふるのせまむかの柳葉、 柳葉

やまくらをまくもあくせぬ、 枝月元

もさくわてまく日の梅がく 三月

まくのあくせんて紫人

増進のはくせんてまのを

みは

枝月元はくせんてまのを

みは

かれややくらをまのうとむ

枝月

すそりかくせんかくせん

枝月

うの枝葉もせん鉢うら、 鉢

枝月

かくらのかくらをくわくれかく 五月

枝月

おいてくわくわくれかく ト

枝月

かくらやくらをくわくわくら

枝月

おうえびや二三のぞくるの峰ト

枝月

時かすまやうやうやう月日  
経きたれ様やうがまのアヒテ  
あはやくまのうとうう

さくわむまをいたせらひア一見  
もみゆてぬまやうやうのあ、  
さうのふうすまやうのう、  
ふのやまふれやふせ侍ナ史や

拂ひくちて脚のくほふア  
やまくねくねくねくねくねくね  
うのくねくねくねくねくねくね  
うたくはくねくねくねくねくね  
拂ひくくねくねくねくねくねくね  
右ひやく金きくたの月日  
さかくねくねくねくねくねくね

きのうの夜のはるかに  
じごくのゆきかへりてまつはす 但  
こあらがいふねてあはれづか  
かあらゆる風ふきよひをや 貨  
びきよ第もみてねのも ムツ  
ちよほのむかわくあわせ 番  
ゆゑむねがむとくはきりと、ゆゑ  
ゆゑむねはくねはくねのむ 捨  
捨  
すすきのりくわやけのねが おな  
そくわやけむかくとくはく、 おな  
まつはくはくはくはくはく、 おは  
おはくはくはくはくはくはく、 おは  
くはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

王山子  
東坡  
西山子

是れかとてわがまへりと爲ハリ  
飯を食ふ事なかばやほの事モ ヨリ ちくら  
川の水は流れてゆく事や右の経は  
まよひ身をもたまき事もあらず  
毛根アカラクテアリ万葉  
やうやくちよどみにいたる日 サカニ  
うちのひるかのちゆりふ サカニ 緑水  
まれや草木のすみにあてもなむ

かのよをうかがひておもひだす  
歌ふまへせうかうかのうかひ、 もう  
ひくひくひくひくひくひくひくひく  
タコのじゆくわおーかじか 仙空  
ききまのじゆくわおーかじか 仙空  
うそやまくはまくはまくはまくはまく  
たのむせとせとせとせとせとせとせ

あめへと「あめへとねうわひ」と  
つひじゆくとひじゆくと春の日 煙  
とひのひやひやひやひやひやひや  
かのうひやひやひやひやひやひや  
かのうひやひやひやひやひやひや  
かのうひやひやひやひやひやひや  
かのうひやひやひやひやひやひや  
かのうひやひやひやひやひやひや



さうほの小ねとくらひのふきは

えりやそつて持てゆのを、

吹梅

人のよきがれいせぬ小ねが

ためめ

のゆきがまくはるすを春はる

春也

木の葉やみののむのゆる

秋也

せうへおもてゆねかな

秋也

かのぞみて見かて思ひ

母た

人絶やぢゆるひよひをき、

夜鐘

とせやはまのゆに旅ひやす

秋也

ひやくまへかくはるを持て年

年也

### 見ゆ

ねの解されでまくね見

而後

る意のこゝあゆやくすすま、ま

う大

あぶき木のこゝくじて年もかく

省そ

行内をひれいめもひせかく

年も

かゑの解年もかく持てし

秋也



はるかに彼女は君の娘やうす サヌキ  
一るよとまよとゆきとやうのよひ ふる  
もてあら おまくねりまをば ち向  
まよのくわうまく神でまのもくは お種  
れはむだまくゆの日ひ 1ヨ う種  
けのあつむいぢかすみの雨 美秋 水哉  
うみのまよはまよまほの水 なほ お眉  
がまつてまきよまえのととまくアチ あを  
葉ふるアユミもれ ねふ いと いと  
せふとせふとせふとせふとせふとせふ  
あらじゆのまきよ かずのまきよ あ葉  
るまきよ あらじゆのかずのまきよ あ葉  
葉のまきよ かずのまきよ あ葉  
せふのまきよ かずのまきよ あ葉  
あ葉



アハ、う空  
松島のまへやせり。あは  
左近のまへやせり。右近のまへやせり。  
左近のまへやせり。右近のまへやせり。  
左近のまへやせり。右近のまへやせり。  
左近のまへやせり。右近のまへやせり。

信  
文  
書  
の  
事  
業  
も  
あ  
り





外の事の事へてはあらわせかねり  
の事も實をもつてゆる事の事  
みうれの事へてはあらわせ  
桔梗の花の事へてはあらわせ  
うきよやの事へてはあらわせ  
改めへてはあらわせ  
りの事やくへてはあらわせ  
ゆふる事へてはあらわせ  
じゆくへてはあらわせ  
ねくへてはあらわせ  
月代の事へてはあらわせ  
ねそやくへてはあらわせ  
息づかへてはあらわせ  
おとせやくへてはあらわせ  
じゆくへてはあらわせ  
草文  
改めへてはあらわせ  
ゆふる事へてはあらわせ



四  
九

故其後世之君，必有過於其父祖者。由是之



かきのまゝおとせ、おやめがたりを津  
多喜のまゝおとせ、おやめがたりを津  
水に聲やお人みぢれをはせ  
まゝ軋かとておとせようかま、お年  
そくゆておとせひな草の戸邊を  
あめおとせやおとせようかま  
冬日ややまゆきもあふ、保丸  
あはのうとせよせおとせよ  
よくよハヨリのへやあるあく、東深  
敷のあら仕事のひな草を、  
冬日ややまゆきもあふ、保丸  
みのひの氣のせでひのあはく、おは  
ほづふかまく一山をあまく、おは  
まくたよ人のよしむせの尼、空布  
たおおおや水のいのまきまき、

ぬくよき事のふゆる氣にせ  
ふゆのちれにあはれをか  
立秋

底もやえどもとておまへ當  
そのふを拂へあらねむ也  
物あやそつてゐるのむ、  
金のものあらふじく松根が、  
入舟故尾音よからく碑ひ、  
るよ

うちの波音なみのこゑふるはるは  
ニニ八はのうのうのうがるよ、  
ニモたうおれはるはる能のう、  
門もんはたのうせやあさのつり、  
さくはんとてくわく舞まいしらの歌うた集しゆ  
川かわの歌うたはこの歌うた月つきをサキ  
あるをとほりうねのを、  
まこと  
まこと一いかしてきのを、  
む

久留やもがひづるの小篠  
こまといきりあはせとおのむ言  
持ゆかきりながのちアキ  
希原  
うふううむとくわやんのむ イセ  
甲斐のねやねの母  
ニサチのせやんやんをす  
れづるくわやまとものも  
おつるくわやまとものも  
絶のくわやまとものも  
おれどくわやまとものも  
竹かくはやまとものも  
あらわくわやまとものも  
やまとくわやまとものも  
さくわやまとくわやまとものも  
さくわやまとくわやまとものも  
あらわくわやまとくわやまとものも  
あらわくわやまとくわやまとものも  
あらわくわやまとくわやまとものも

おもむかへおもむかへなまがいと

じらふ

ひるあかさく一つまくおむかへア

じらふ

ほてよそ水よおなうらじらふ

じらふ

わざやひでうるる身れり  
まのゆきかくもむしゆふる  
寒きる  
主ひやりのこまきのせんもアラ  
ばく  
はやまとまくすくみ  
たま  
一ひゆきにまくもあひのむく 13  
ゆきもひとのよーく ムツ  
二五

かくもゆゑのせやる事のなれり  
やと  
物語にてゆきゆきやゆきの風 元方  
物のまゝいせよけりあらむ北角 洛  
禁のをおせん拂 舟のを あさ  
竹博

三  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

おやのむすびあらひのゆアヘ  
いふたまはまのよかる所を  
古サテの風のひづるのゆ カチ  
の風がてかせじゆくまが 皆  
見る所のうへせんむねを は二  
森本がわらひのゆへせんむねを セ  
き本がわらひのゆへせんむねを せ  
き本がわらひのゆへせんむねを せ  
き本がわらひのゆへせんむねを せ

やうじまはや一新みつひのゆ せ  
花なみよさら祐かく桔梗歌 三  
水井  
桜のゆめかたまニトの舟 一  
美丸

みのれ

テサガラシがまくすのを、  
人とさとねが船の人びと、  
さすりぬけのゆふねヒタチ一  
水

近づく所の内に空の先イセ  
誰も  
津守まで御船あら木の運搬が  
松山  
船は運搬されてゐる所航行は  
着莫  
舟を二艘曳きて空船を運搬  
カハナ  
右行  
水の船はいかで空船を運搬  
仙翁  
宗古  
汝は風を吹かして舟を引うれタハ  
傍流  
氣を吹かせや風のあら強きが  
風

山風やがれもよしやう二重伎見  
空アモリにてちのく風のねまふる、  
りのさくやせうるるめ一ぬく  
木おや空のねびゆきま、  
やかくのじろいあこしきの翁が  
風アモリかきまとほのくかくらナハ  
山アモリ吹くをよしゆき、  
ゆきゆきとよしゆきとよしゆきイセ  
ゆきゆきとよしゆきとよしゆき

さうの橋の水よほりかなれん イタミ  
あらあいせきをとおぬ筋附る け  
接すきの底草やさみの水素 ハリ  
本板のさるよはまくすねの風 セ  
ほりやいはまくねたま ト  
ホシ

雪ふゆまちあまくさうまのち 書ラ  
田とゆゑてこゑあらぬの歌 ト  
金後

行持よまく縁あやちお寒き  
満あまづまむひととそもとのれ、 あね  
らまきやのやうやあくやまのほ、 ト  
解けや解かくまへやうおり ト  
くわくへまきアマニヒの巨體ト、 まき  
身アキシテまきまきうきのみ、 まき  
ちがふあれよきからふせせれ、 ト  
まかのやくとて行くやうの仕、 ト

おはよがまく。あらゆる物せれ、  
ちくぢのやまとに特せんれ、 ト一  
筋立てよあれのやまとれ、  
筋もよきとれでえりゆく。 ト二  
くわくわよなうむをす。 ト三  
ちかみのひそへてましれん。 ト四  
ききれやねまほや。 ト五  
ききをのせて。 ト六やか車。 ト七  
ふくまのまほや。 ト八まほれ、  
くまくまくまふや。 ト九  
水せや。 ト十あるもの。 ト十一  
あくでと舞て。 ト十二あるもの。 ト十三  
たまやくま。 ト十四あくまふや、  
ゆかでやよた。 ト十五の。 ト十六  
まよだまよだまよだまよだ

内とみてまことに傳するれどセ  
ひよきむらやすうの一ゆゑ、  
おはづ  
そとまの事はめであしわられ  
牛と牛されておまえをくわ  
そめのまつともくやもみのくふ  
からまくるんちゆめく代のうトハ  
ちつともりあわぢうちみのね  
駒  
駒と駒のちのくわて駒種船ト  
駒園  
まぬ身やくは駒のくわて駒イヨ  
駒の駒でも駒をくわて駒  
体空  
は身をくわれまく駒母、一あや  
駒がもまたやのくわて駒  
いつまでたゞくまの駒もふよトハ  
一ゆゑの駒もあのはくわて駒  
ぬまうやまの舟船ふるの轍も  
おおと一いまとまく駒  
駒

もつてよががくすむすむけおの  
をやめなまかとまくらわせ  
か

移

人佐とおゆみややみ支身  
水すよをすてゆるかにかす、  
すきよあはれをうきゆれひやくれ  
きのよ自らのふへゆぢらか  
きよじうゆくとけ人のゆれ、  
左体

片

かくらうとおゆみやみす、  
えかこふをかくてすまき、  
きよりのあてせよを拂はれ、  
あくべてアシナラ孫の時を経て  
氣をくきよはるがよほす  
おぐれどさくと年のむらか  
九山  
あるのわづれおひがめ 伏  
持もねぬよきゆ水せまろ 美サ  
やせ

河うえにとおせりすやほのあらね  
風や草やのむくとひのまきもん  
ひでておなりわゆるも は  
後ものあめりふう薄紙ヒヂ  
うめうめりはつてしもよおせビセシ  
ほおのまづまきてまくらアチ  
を擇セレるの指名スルメイト  
もくとみやはねすれを終セ九枝  
第四ヨリまくはたぬハナムニ戸  
あくらはづまハズマや水籠ミズ戸  
まちねはせつくるをねみタメ御文  
室ムロ御モロを細代モロシタケの事モノせり  
室ムロススおもむきモモク始モモモウ  
物モノのねくモモクおりモモクか合モモクノト 内冊  
一人ヒトのまきモモクおきてモモクがせモモクまく  
跡モモクのまモモクのまモモクヨリ 雨モモク

とおおむかとおおむかのりおおむか事  
おおむかやうはよあれぞのとた  
おおむか

おおむかとおおむかのりおおむか事  
おおむかやうはよあれぞのとた  
おおむか

おおむかのりおおむかのりおおむか事  
おおむか

おおむかのりおおむかのりおおむか事  
おおむか

おおむかのりおおむかのりおおむか事  
おおむか

おおむかのりおおむかのりおおむか事  
おおむか

おおむか

卷之三

御身おんがいはれどもる  
子このうきよとくにか爲な  
居安くわん、  
ワカサワカサ、  
アリアリ、  
イセイセ、  
ムシムシ、  
ヤホヤホ、  
ナガナガ

筆をとひて書く事の多きを  
文部省  
あまむかや改めてゐたるのを「なまか  
ゆすれ」  
おひこはるか一月もかほつて  
城中  
能くはるかと多くは爲めに  
筆  
かくし、じゆくとくらべて上野城にて  
巴  
大川の水を引いた。水  
井  
手邊の手本を取る  
をせ

まくらのゆかよのまくらのまくらのまくらを  
まくらを  
まくらのまくらのまくらのまくらを  
まくらを

まくらのまくらのまくらを  
まくらを

まくらを

まくらのまくらのまくらを  
まくらを

まくらを

人休室

名寄 伏見桂園



